

2022(令和4)年度東京分室 PD 研究員個人研究成果報告

個人研究

現代における在日コリアンのキリスト教信仰の研究—1960年代以降の韓国社会の宗教変動に注目して—

研究代表者・元東京分室 PD 研究員 荻 翔一
(宗教社会学)

本研究は、現代における在日コリアンのキリスト者の信仰生活の特徴を明らかにすることを目的とするものである。特に本研究では、一世とは異なり、日本で生まれ育った二世は、いかにしてキリスト教信仰とエスニシティの問題を関連させて捉えていったのか、また1960年代以降、韓国社会でキリスト教（特にプロテスタント）が急成長したことや近年のグローバル化を背景に、1980年代以降に到来した韓国からのニューカマーは、在日二世の信仰生活にいかなる影響を与えていったのか、という点に着目した。

本年度の研究成果は大別して、①在日コリアンと宗教をめぐる先行研究の成果と課題の析出、②在日コリアンキリスト者（特に青年層）の「民族」と「信仰」をめぐる議論の整理と分析、③在日コリアンキリスト者の信仰生活に関する聞き取り調査とその分析の3点があげられる。

まず①について、2019年までに刊行された在日コリアンと宗教の関係を主題とする日本語の学術論文・学術書を収集・整理し、その成果と課題を析出した。その結果、近年の動向として、宗教者・信者の文化的背景の多様化が論じられるようになっていながらも、そうした現象が、宗教組織や宗教儀礼の維持・継承、信者の信仰生活にいかなる影響を与えるのかという点については、未解明の点が多いという課題を明らかにした。こうした成果は、公開シンポジウム「宗教と多文化共生—「在日コリアンの宗教」の現在—」（於：大谷大学、2022年11月26日）で報告したほか、東洋大学アジア文化研究所のSDGs 動画（『「在日コリアンと宗教」研究の整理と課題』）として公開し、『アジア諸国の持続可能性（1）』（2023年）にて論文化した。

続いて②について、ニューカマー到来以前の1950-70年代前半の在日大韓基督教会の青年会資料をもとに、在日青年キリスト者（二世）の議論の変遷を整理した。その結果、60年代から70年代前半にかけて一貫して、一世が中心となる教会が在日の生の問題

（＝社会問題）に目を向けてこなかったことがしばしば指摘され、その閉鎖的な体質が批判されてきたことを確認した。ただし、60年代には信仰心をベースに在日の社会問題に取り組むことがしばしば主張されたものの、70年代前半になると社会問題に取り組むことは継続されつつ、60年代にみられた信仰心ベースの主張が「信仰至上主義」だと批判され、民族愛をベースに社会問題に取り組むこと、それが「真のキリスト者として立つことができる」という論調がみられるようになったことを明らかにした。こうした議論は、信仰とエスニシティを結合させた「在日キリスト者」である自己のアイデンティティ構築や、その生き方を方向付けようとした試みとして捉えられるといえる。本研究の成果は、日本宗教学会（於：オンライン、2022年9月10日）で報告した。

最後に③について、1980年代以降の在日コリアン二世の信仰生活を把握するため、東京および関西（大阪・兵庫）において聞き取り調査を実施した。その結果、1980年代以降、教会にニューカマーの韩国人が多く参与するなかで、彼ら／彼女らの存在が在日コリアン二世の信仰生活にも影響を及ぼしていることが明らかとなった。具体的には、自らが所属する教会の選択という信仰生活を送るうえで重要な契機にニューカマーが関わる事例、ニューカマーの信仰心と比較して自身のそれを位置づける事例、到来するニューカマーに対抗するような教会運営を志向する事例があげられる。他方で、教会選択の背景に在日一世である親とのつながりに言及する調査協力者が少なからず存在しており、クリスチャンホームで育った在日二世の信仰生活において、家族ネットワークの要因は決して無視できるものではない。そのため、在日二世の信仰生活を分析するうえでは、在日一世の親を中心とする家族ネットワークに加え、近年到来したニューカマー双方の影響をみる視点が必要であると考えられる。

今後の課題として、在日二世個人々人のエスニック・アイデンティティの在りようを明らかにし、それがニューカマー（とその信仰スタイル）に対する評価といかにリンクしているのかを分析することで、信仰とエスニシティの結合（ないしは分離）の諸相を考察することがあげられる。